

この2年間、大阪府協会が総力をあげて取り組んだ全日本大会。競技規則のガイドラインが制定され、今までの大会とちょっと違う事も多い。今後のビッグ大会運営のありかたのための提言も改めて振り返る。

## 大阪にテレインはあるのか？

12年前に第22回全日本大会を大阪府が担当することになった時、それにふさわしいテレインを求めて大阪府じゅうを探し回った結果、奈良県菟田野町(現、宇陀市)での開催となった。ロングディスタンスに対応できる良好なテレインが府内に無かったためである。今回、主管の依頼があったのは2年前。もうテレインを捜している時間はなかった。すでに使われたことのある地区でも仕方が無い。地形や植生は変えようが無い。近場でないと地図作成も危うい。でも、地図とコースでカバーすればなんとかなる。そう考えて、開催を引き受けた。

当初は、最近使われていなかった高槻市の撰津峡付近をあたってみた。行政は協力的であったが、地元的地権者があまりにも多く、地元交渉は極めて困難であったため、無理と判断した。第二候補であった箕面は地元ではよく使われたテレインだが、急峻なためオリエンティアの評判は良くない。アクセスの良さが唯一の好条件であった。

さらには、メイン会場の確保も難航。フィニッシュ(競技規則が変わり、ゴールとは言いません)も希望地区の許可がおりず、かろうじて廃道を利用してしのいだ。地元の理解を得ることが少しずつ難しくなっているように感じる反面、山麓保全委員会や猟友会には多大な協力を頂いた。地元との接触、良好な関係を作ることは極めて重要で

ある。

## 競技規則はどう変わった？

昨年6月に競技規則が改訂され、ガイドラインが制定された。さらに3月には追加で一部の改訂があり、今回はそれを受けての初めての全日本(個人)なので、気をつかった。かなり、規則の改定に振り回された感もある。

### 1. 競技時間

競技時間を事前に公表することになった。オーバーした場合、記録は失格である。基準は設定優勝時間に対し、Eクラス150%以上、Aクラス200%以上となっている。しかし、石川県の全日本リレーで見られたように、単純に適用すると失格者続出の危険がある。コース難度には充分注意をするが、完全な予想は無理である。そこで以下のようにした。

21Eは150%

20Eは175%

Aは200%

設定優勝時間60分以下は全て2時間

そのコンセプトは、

は選手権なので、厳しく足きりも必要。は実力差が大きいことが予想され、少しゆるめに設定。そして、が今回のポイントである。このクラスレベルでは、実力差が大きい。例えば、優勝時間40分に対して200%は80分になる。中級者が走ると、トップとのタイム差がミスなしで15分。一回大きいミスをすれば、15分~20分はすぐに経過する。少し長めに設定してしまうと、ちょっとミスを繰り返しただけで、すぐ失格になってしまう。一生懸命がんばって完走しても失格ではモチベーションも下がる。やはり完走は評価したい。その一方で、これらのクラスには、長時間の無理な競技は危険であり、大会運営の時間的制約もある。そのバランスとわかり易さの点から、要項の段階で、「一律2時間」を提案させていただいた。幸いこれは3月改訂でガイド

ラインに取り入れられた。

結果、競技時間オーバーの失格は参加者の5%(35名)となった。きびしいテレインなので、易しめのコースにしてこの程度の数字。まずは妥当な線かと考えるが、今後どのような結果が出てゆくであろうか。

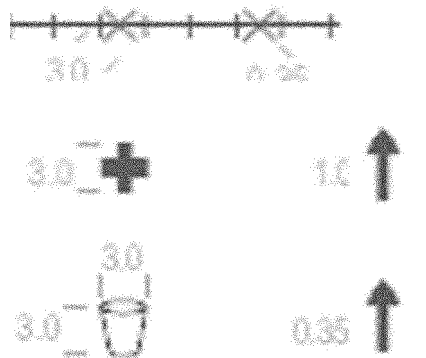
### 2. 位置説明記号、地図図式

大きな変化ではないが、3月から位置説明記号も変わった。変更点は公式掲示板に出し、プログラムには新規程を載せた。変更のあった記号で実際に使われたのは、70番コントロールの「記念物・彫像」の記号(上に尖った)だけだったと思うが、気づかれたであろうか。

5.17	◎	境界石・ケルン
5.18	↑	給餌台
5.19	⊙	炭焼き窯跡・炭焼き場
5.20	△	記念物・彫像
5.23	⊐	建物の通過できる部分
5.24	↗	階段

位置説明記号の一部

逆に、あえて規程を破った記号もある。あまり知られていないと思うが、地図図式規程(JSOM2007)では、救護所や給水所の記号は径3mmである。試しに印刷してみると、小さくて見にくいことに気づいた。これらの記号は参加者の安全のために存在する。目立たなければ意味が無いのだ。コントロールの了解を得て、5mm程度まで大きくしてもらった。



通行禁止、救護所、給水所

### 3. シード選手

Eクラスにおいては、シード選手を



プログラムに使われた写真は、万博公園からみたテレインの遠景

選ぶこととなった。細かい規定は無く、主管者任せのようだったので、エントリー数にあわせて、M21E:10名、W21E:5名とした。選考方法は、本大会が世界選手権代表選考会でもあることから、A強化選手を全員シードとし、残った男子3枠、女子1枠を、「日本ランキング」の上位から選んだ。JOAの年齢別ランキングは5歳きざみでの評価なので、Eクラスの選考には使いにくく実際的ではないと考えた。ただ、この「日本ランキング」ランキングの方法は優れているが、ホームページでも、0マガジンを見ても、「日本ランキング作成委員会」となっているだけで、どこに所属する組織かわからなかった。聞いてみると、現在ボランティア数名で運営しているとのことであった。できれば、公式認定されたランキングがほしいと思うのだが、いかなるものであろうか。

#### 4. ホイッスル

香港での事故でホイッスルが重要な役割を果たして以来、ホイッスルの携行を積極的に勧めようという意見も多い。ガイドラインにも明記されるようになり、プログラム、ホームページ、公式掲示板などで、その使用方法とともに周知を計った。一体どのくらいの人々が持っていたかわからないが、今後も引き続き周知をしたほうが良いのではないだろうか。イギリス系の国々(香港、オーストラリアなど)では、義務付けられていることも多い。自分の安全を守るための手段である。ただし、いたずらも懸念される。参加者のマナーに任せるしかないのが現状である。

#### 地図づくりの苦労

今も昔も、大会運営の最大の課題は地図づくりであろう。当初、大阪OLCの箕面をベースにする予定であったが、二万五千分の一の地図から起こしたものであったこともあり、GPSを入れてみるとかなりのずれが判明。結局五千分の一の行政図をベースにした。しかもGPSは沢筋では全く位置が取れず、始めのうちは本当に地図が出来るのかという不安もあった。

OCADにより、以前よりはるかに短時間で、見やすく、正確な地図が作れるようになったが、地図調査やOCADによる作図には、どうしても多くの経験が必要である。今回は楠見氏の努力でなんとかあったが、それでも二次調査には、中村弘太郎、橋本裕志両氏の応援をいただいた。地図を作れる人を育てることも急務である。



箕面 とみのおの比較：勝尾寺の池や建物の位置がこんなにも違う

たくさんのコースを印刷する場合、コストを考えると、今やプリンタによる地図印刷は主流である。ただ、同じデータを元にしても、使うプリンタの機種や紙質により、色のイメージはかなり変わってくる。IOFではそのための基準となる公式色見本を作成して各国に配布した。本番に使用した地図は、この色に合わせるために、プリンタの印刷設定でかなり試行錯誤を要した。全てのコースを同じようにするためには、プリンタの台数が限られるので、印刷に時間がかかるし、印刷担当者の負担も大きい。「そこまでせなまへんか」というのが本音である。

OCADのもたらしたもう一つの恩恵というべきか、地味であった大会会場に多少なりともイベント性を持たせるべく、Eコースの巨大マップを作成してみた。雨天でなければグラウンドにおいて、より多くの人にディスカッションのための道具としてもらうつもりであった。お楽しみいただけただけであるうか。



巨大マップでディスカッション

#### コースプランナー対競技者

以前、0マガジン誌に、「コースプランニングに目をむけよう」というオピニオンを投稿させて頂いた事がある。

プランナーは大会のプロデューサー。大会運営の中で最も重要な仕事であり、難しくもやりがいのある、本当に楽しく面白い仕事である。この仕事は瀧川氏にお願いした上で、勝手に「ベテランプランナー瀧川英雄が全ての皆様に満足していただけるコースを提供いたします」という宣伝文句を作って要項に載せた。本人はプレッシャーを感じながらも、「受けて立ちます」と。この時点で私の立場からすればコースは完成したも同然となった。

Eを中心としたコースコンセプトは瀧川氏原稿に譲るとして、意識したのは「下を見る」ことだった。レベルを保ちつつ皆が完走できるコースを作らねばならない。兵庫県の全日本リレーの経験から、この手の急峻で厳しいトレインでは、少し難しいコントロールがあるだけで多くの競技者が脱落してゆくことが予想された。失格者多発ではコースプランは失敗である。特に若年者には失格は無いようにしたい。その結果は、一部のクラスでは想定よりかなり早いウイニングタイムとなったが、全体の完走率は87%、競技時間オーバーは5%であった。競技者の健闘をたたえるとともに、適切なセットであったと思っている。

優勝した鹿島田氏が、ブログで公開しているアナリシスによると、ロングレッグはかなり読まれていたようである。しかしこれは、コースセットの失敗ではなく、むしろ成功を意味している。事前に公開された地図を研究すれば、オリエンテーリングの真の能力を問う適切なコースというのはある程度決まってくる。そういう良好なコースプランを提供したプランナーと、それを研究し十分な準備をしていた競技者が、結果において予想タイムほぼびったりとなるがっぴり四つの戦いは見事なものであった。本当に優れたコースというのは、参加者に「難しくて手応えがあったけど、コースプランナーに勝ったぞ!」と思わせる事ができるコースである。



コース終盤の微地形エリア。技術的要求度が高く、ミスをするると所要時間は大きく伸びる。

## Eカードのジレンマ

今大会のパンチシステムには、EmitのEカードを使用した。SIは、以前大阪府でウェスタンカップを主催したとき、寒さのためかステーションがうまく作動しなかった苦い経験があり、また大阪OLCがEmitを使い慣れているからである。



Eカード

使い方で議論になったのは、「リフトアップスタート・パンチングフィニッシュ」でするのか、「スタートとフィニッシュの計時は時計で行い、Eカードは通過証明のみとする」か（ラップは正式記録とは関係ない）である。前者は、運営が容易で成績処理が非常に早い、カードのストップウォッチ機能による計時のため、カードにトラブルがあるとバックアップ計時での確認

が必要になる。後者は、公式記録は正確に出るが、フィニッシュタイムを全て入力しなければならず、成績確定に時間がかかるし、700名近く手入力では、入力ミスの発生も懸念される。今回は、フィニッシュと会場も離れており、参加者数も多いので、前者の方式で行った。成績確定、未帰還者チェック、表彰は順調に進んだと思う。ただ、リフトアップスタートの場合、遅刻者をどう扱うかに多少問題があった。結論としては、遅刻者にはスタート係りの指示に従ってもらい、分30秒の区切りでスタートさせ、その時間を記録して加算するという方法をとった。



パンチングフィニッシュ

一方、Eカードそのものは、導入さ

れて月日が経つとともに、電池切れによるトラブルが多発するようになってきた。エントリー時にマイカードだったのをレンタルに変更した人は10名以上にのぼる。レンタルカードのほうは、前日に再度動作チェックを行ったにもかかわらず、数枚の動作不良が出た。さらには、当日朝の前走チェックでも原因不明の不通過（99番コントロールという、本来ない番号を通過したように表示される）が多発した。カードの問題か、ユニットのほうにも問題が起き始めているのか、あるいはパンチの仕方の問題か、結論は不明であるが、かなりの人がバックアップラベルでの通過確認を余儀なくされ、またEカード動作不良については、バックアップの計時による記録でタイムを確定させた。

さらには、朝8時には全てあわせていたPCの時計が、なぜか読み取りPCのみ最終10秒近くずれており、計センソフトMulkaの遅刻警告機能が頻発するようになり、問題のあるカードの多さと相まって、計センは一時ピンチに陥ったが、河合チーフをはじめとするスタッフの努力で何とかしのいだ。（読み取りPCの時計がずれていても、所要時間はフィニッシュコントロールをパンチした時間で計算されるので、問題はありません。念のため）

今後も電池切れは多くなると予想される。器械には故障はつきもの。十分なバックアップ対策をしておく必要性を痛感した。また、急なトラブルを処理できる、PC操作に慣れた人の養成も必要である。



Eカード読み取りの行列

## 救護体制の自信と不安

以前、Oマガジンに大会の救護体制について提言をさせてもらったことがあったが、今回はそれに準じて準備をすすめた。幸運なことに、大会スタッフの中に、医師3名、看護師2名、保育士1名がおり、（全員オリエンティア）かなり良好な体制が敷けた。トレインの中へ車で出動する場合も、看護師が自ら運転してゆくというシステムを作っておいた。備品としては、通常用意

されるもの以外に、今や人が集まるところへの設置は必須となった感のあるAEDは2台(会場とフィニッシュに各1台)用意した。レンタル料は、2泊3日で1台1万円くらいである。ただ、連絡のとれない山の中で人が倒れたときに、本当にAEDの出番はあるのだろうか？



AED

大会の開催時期は、極寒や酷暑の心配がなく、危険な動植物も少ない、比較的安全な季節である。むしろ、ハイカーやマウンテンバイクの人の衝突が懸念されたが、幸か不幸か雨天のためそのリスクは下がった。

給水所の水はどのくらい用意すればよかったのだろうか？ 一人100cc×600人で60?。車をおりてから1キロ以上あるあの山道を、前日に30本にもぼるペットボトルをかついで登ってくれた救護給水スタッフがいたことを参加者の皆さんに知っていただければ幸いである。

一方、不安材料もあった。急峻な山の中では携帯電話が通じないのだ。救護所、給水所とも、数百メートル移動しないと通じない。定時報告を一定時間ごとにするという体制をとっておいた。もうひとつ、トレインの中央部には車でのアクセスができない。動けない人が出たらどうするか、スタッフも多くはない。祈るような気持ちであったが、幸い歩けなくなるようなあるいは救急車を呼ばなければならないような事態は発生しなかった。幸運なだけだったのかもしれないが、可能な限りの体制は敷いたつもりである。

## 若者が参加したくなる大会を!

若い人の参加が少ない。特に高校生や大学生。宣伝努力にもかかわらず、エントリーは少なかった。「全日本」は若い人に魅力のない大会なのだろうか？ さらに、全日本チャンピオンを決める大会なのだから、中学生、高校生のチャンピオンを同時に決めるといのは自然な姿だと思う。これからは、

中学生、高校生のチャンピオンを公式に認めてゆくべきである。そうすることによって、学校や親、世間に競技としてのオリエンテーリングが認識され、有望な選手の発掘にもつながる。

そんな思いもあって、さらには参加者を増やしたい下心もあって、一年前の段階で、中高生OS会にインターハイとのコラボレーションを提案してみた。彼らにとって、良質な地図とコースが提供されれば運営の負担が減り、イベント性に集中できるし、多くの人に中学生高校生オリエンティアの存在を認識してもらうことができるので、メリットは極めて大きいと考えたのだが、結果はノー。理由はいろいろあるだろうが、「あくまで自分たちで大会を作り上げたい」という思いを感じた。それはそれで素晴らしいことである。かつて、創成期のインカレを作り上げて来た世代の一人として、その気持ちと意欲はよくわかるし、大切にしたい。

でも、多少意地を張って、中学、高校生(M/W 15A, 18A)を全て選手権のEクラスと同じ第一レーンから、3分間隔でスタートさせた。ナンバーカードの色もEクラスと同じにした。彼らのモチベーションは上がっただろうか。この中から数年後に真のエリート選手が出現することを期待したい。



第一レーンからスタート=ナンバーカード1000番台のM18Aの高校生選手

高校生、大学生の参加が少ないのは、インカレやインターハイと日程が近接していることも理由のひとつかもしれない。短期間に何度も遠征することは、特に高校生の小遣いでは苦しいであろう。また社会人にとっても年度末の多忙な時期に参加するのは困難かもしれないし、運営者もつらい。

例年お彼岸の頃に実施されている全日本大会が、今回は3月30日になったのは、お彼岸だと勝尾寺や北摂霊園に行く車で周囲の道路が墓参の車で渋滞するので、運営上支障がでる可能性があったため。

皆が参加出来てこそその全日本だし、参加者が多ければ運営者もやりがいがある。そういう点を考えてゆくと、個

人的には全日本大会をゴールデンウィークの頃にもってゆくのもひとつの方法ではないかと考えている。



エリート選手の卵たち

本大会をステップとして、さらによりよいオリエンテーリング大会を開催していただけることを願っています。拙稿が皆様のお役に立てば幸いです。(愛場庸雅)